

ステレオタイプの態度とその測定

学位論文内容の要旨

本論文は、日常的に多くの場面で観察されるステレオタイプの態度の測定という観点から、これまで用いられてきた種々の測定法を実証的に検討したうえで、新たな測定法を提案して、その有効性を確認したものである。本研究では、顕在尺度と潜在尺度を用いた一連の実験結果の考察に基づき、新たに多属性の事例評定課題を導入して、コンジョイント分析による重要度評価をおこなう方法を提案して、その有効性を実験的に検証している。

第1章では、ステレオタイプ研究の概略を示し、ステレオタイプの定義、認知への影響、測定方法などをまとめている。測定方法については、潜在尺度は意識的には制御できない段階のステレオタイプを測定する方法であり、顕在尺度は意識的に制御された段階のステレオタイプを測定する方法であることを示している。

第2章(実験1)、第3章(実験2)では、顕在尺度と潜在尺度の2種類のステレオタイプ測定尺度による測定実験をおこない、両尺度を比較している。これら両尺度の比較検討をおこなった先行研究の結果が一貫していないため、本研究で改めて比較をおこなっている。実験1ではジェンダー・ステレオタイプを題材に、実験2では血液型ステレオタイプを題材に測定実験をおこなっている。その結果、実験1、2のいずれにおいても、両尺度による測定結果に乖離が生じていることを確認している。そのことから、尺度間比較が困難であることが示唆されている。また、顕在・潜在尺度によるステレオタイプ測定は、具体的な事例判断と結びついていない抽象度の高いステレオタイプ測定方法であり、具体的個別的な事例判断で、無意識的なステレオタイプ態度と意識的なステレオタイプの態度がどのように一致、あるいは乖離しているかを検討することはできないため、測定方法としてコンジョイント分析によって具体的な多属性事例評定課題でのステレオタイプの態度を測定するという方法を提案している。

第4章では、最初にコンジョイント分析が、多属性からなる評価対象に対する評定課題を介して表出される、隠れた態度を解析するために用いられる方法であり、ステレオタイプの態度の測定のために如何に応用するかを示している。特に、本研究独自の方法として、直接的に評定態度の表明(直接重視度)を求め、コンジョイント分析によって算出される、隠れた評定態度(間接重視度)との比較をおこなうという研究方針を示している。両重視度は同一の対象に対する態度を測定するものであり、その違いは直接的に表明された態度であるか、評定課題を介して表出された態度であるかの違いである。そのため、直接的に表明された態度と隠された態度との量的比較が可能である。次いで、血液型ステレオタイプを題材に、恋愛文脈において直接的に表明された態度と評定課題を介して示された実際の態度とを比較検討している。また、直接重視度、間接重視度の他に、血液型の有用性を直接的に尋ね、その回答と両重視度の乖離との関係について検討している。その結果、直接的に血液型は性格推測のために役立たないと回答する実験参加者のみにおいて、直接・間接重視度に乖離が見られることを確認している。すなわち、性格推測のために血液型は役立たないと直

直接的に表明する実験参加者は、自身のステレオタイプの態度に気づいていないなどの理由により、ステレオタイプの判断をしてしまっていることが示唆されている。

第5章では、評価文脈が異なれば高評価される集団も変わること、評価文脈が変わってもステレオタイプの判断をおこなっていることを検討している。本研究で導入したコンジョイント分析によるステレオタイプの態度の測定方法は、個別的具体的事例を測定対象として扱えるため、こうした文脈の違いによる態度の違いを量的に検討することも可能である。題材として、恋愛の文脈、就職採用の文脈でのステレオタイプの影響を検討している。さらに、血液型ステレオタイプに加え、県民性ステレオタイプを用い、第4章と同様の実験をおこなっている。その結果、文脈によって好まれる血液型は異なっており、また、文脈が異なっても、血液型ステレオタイプの判断がおこなわれていることを確認している。一方、県民性ステレオタイプに関しては、文脈によって好まれる出身地は異なっていたが、いずれの文脈においても県民性ステレオタイプの判断はおこなわれていなかったことが確認している。これらの結果は、評価文脈が異なれば好まれる社会集団は異なるが、ステレオタイプの判断がおこなわれるか否かは一貫していることを示唆している。

第6章では水準数の効果の確認実験をおこなっている。第4、5章では、実験に用いた各属性の水準数が揃えられていなかったため、水準数の違いが間接重視度に影響していた可能性も考えられるためである。実験の結果、第4章の実験結果が再現され、水準数が大きな影響を及ぼしていなかったことを示している。

第7章では、直接的に表出されにくいジェンダー・ステレオタイプを題材に、部活動の部長としてのふさわしさを評定する部長選出課題をおこない、コンジョイント分析によって直接・間接重視度の乖離を検討すると同時に、3種類の顕在尺度(分散推定課題、平均推定課題、Brigham課題)による測定もおこない、結果の比較をおこなっている。その結果、低い重視度であり、乖離は見られていない。また、直接重視度と平均推定課題、間接重視度と分散推定課題の測定結果に一致が見られた。直接重視度と平均推定課題は、いずれもその質問意図が明確であり、その回答の操作が容易であるのに対して、分散推定課題は比較的その質問意図が不明瞭であり、その回答の操作は比較のおこないにくい。これらのことから、ジェンダー・ステレオタイプには直接・間接重視度の乖離が生じていないこと、直接・間接重視度はいずれも等しく評定態度を測定したものであるが、顕在尺度との比較から、直接重視度はその回答の意識的操作が容易であり、間接重視度はその回答の意識的操作が比較的困難であることを示している。

第8章では、具体的で個別的な多属性事例評定課題において、意識的に自身のステレオタイプの態度の表出を制御できるかを検討するために、直接重視度を先に表明した後で評定課題をおこない(先条件)、比較検討している。実験の結果、先条件と後条件の間接重視度は一致していたが、直接重視度は一致していなかった。先条件と後条件の間接重視度が一致していたことから、ステレオタイプの影響を意識的に抑制することは困難であることが示している。

第9章では、本研究で得られた知見について概観している。次に本研究で得られた特に重要な知見である、直接的に表明された態度と評定課題を介して示された実際の態度との乖離について考察をおこなっている。また、ステレオタイプの判断の意識的な制御可能性、社会におけるステレオタイプの態度の変容可能性についても考察している。最後に今後の展開として、心理学的な論点として、ステレオタイプ抑制動機の影響の検討、ステレオタイプ抑制方略の検討などがあげられること、また心理学の領域に限らず、倫理学などの様々な学問領域の知見を参照し、良い意思決定とは何かを改めて検討する必要性についても論じている。

学位論文審査の要旨

主 査 特任教授 瀧 川 哲 夫
副 査 教 授 和 田 博 美
准教授 高 橋 伸 幸

学 位 論 文 題 名

ステレオタイプの態度とその測定

本論文は、日常的に多くの場面で観察されるステレオタイプの態度の測定という観点から、これまで用いられてきた種々の測定法を実証的に検討したうえで、新たな測定法を提案して、その有効性を確認したものである。本研究では、顕在尺度と潜在尺度を用いた一連の実験結果の考察に基づき、新たに多属性の事例評定課題を導入して、コンジョイント分析による重要度評価をおこなう方法を提案して、その有効性を実験的に検証している。

本研究の成果は、従来用いられてきたステレオタイプ測定方法である顕在尺度と潜在尺度の測定結果が一貫しないことを一連の実験で確認し、また、同一の集団ならびに同一の属性で尺度間比較が困難であることを確認した上で、具体的な多属性事例評定課題を導入し、属性の重要度評価をコンジョイント分析によって比較することを提案して、その有効性を示したところにある。この方法を用いた結果、属性の顕在的重要度評価においてステレオタイプの態度を持っていないと表明しているにもかかわらず、評定課題のコンジョイント分析による重要度の判定では、一定のステレオタイプの態度が検出されるなど、顕在尺度での態度と、事例評定課題を介して示された態度との乖離を量的に明示することが可能となったことが示されている。潜在尺度は無意識的に働くステレオタイプの態度を測定するものであるが、具体的な事例評定とはむすびついていないことから、無意識的なステレオタイプが具体的な事例評定にどのように影響しているかを検討することは困難であった。本研究において導入された多属性事例評定課題に基づいてコンジョイント分析を施すことによって、隠されたステレオタイプの態度を分析するという手法は、こうした難点を解決するものであり、ステレオタイプ研究に新たな方向を示したと言えよう。

本論文の意義は、判断主体がステレオタイプの態度を意識化しているか否かという心理学的観点からステレオタイプの態度測定法の諸問題を明らかにし、さらに多属性の具体的事例評定課題を取り入れてコンジョイント分析をおこなうことによって、ステレオタイプの態度を持っていないと表明していながらも、実際の選択場面ではステレオタイプの態度による歪みが生じていることを量的に示すことが可能になった点にある。これまでステレオタイプの現象についての研究は数多いが、測定論の観点から考察した研究は多くなく、その点からも、本研究で導入された事例評価課題のコンジョイント分析という手法によって、ステレオタイプ研究の新たな方向が示されたと言える。審査の過程で、一連の実験が部分的に必ずしも連続性を持たないこと、また、コンジョイント分析の対象となる重要度の部分効用値が小さい現象が多いという指摘はあったが、この点については今後の研究の発展の中で明確化していくべき課題であり、本論文の意義を損なうものではないという審査委員一同の意見である。

本審査委員会は以上の審査結果に基づき、全員一致して本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしい水準であるとの結論に達した。